

企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年—『みられる私』より『みる私』」の実施報告— 関連機関との連携事業を通して

竹田多麻子*

はじめに

横浜ユーラシア文化館では、令和1年10月5日から12月22日まで企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年—『みられる私』より『みる私』」を国立民族学博物館（以下、民博）、一般財団法人片倉もとこ記念沙漠文化財団⁽¹⁾（以下、沙漠文化財団）と共催で開催した。本展は、これより先に民博で6月6日から9月10日まで開催された展示の巡回展である。展示では、サウジアラビア西部のオアシスの村に暮らす女性の生活文化の変遷をたどり、関連企画として講座やワークショップ、イベント等を実施した。メディアにも多く取り上げられ、観覧者数は目標を上回り10,380人に達した。

巡回展という形での展示は、今までいくつかの実施例があるが、今回のように民博、沙漠文化財団をはじめ多くの関連機関と連携して展示及び関連企画を実施したことは初めてのことである。

本稿では、本巡回展の事前調査と展示計画から実施に至るなかで筆者が当館担当として携わった範囲での経過を記録し、関連企画を様々な機関とどのように連携して作り上げていったのかを報告する。

1 展示の趣旨

1960年代末、文化人類学者の片倉もとこ氏は、サウジアラビア西部に位置するワーディ・ファータイマ地域で当時不可能とされていた長期調査を行った。その調査から半世紀にあたる現在、沙漠文化財団による同地での追跡調査が進められている。本展では、その最新の調査結果を交えながら、片倉

氏が現地で撮影した貴重な写真を手がかりに、色鮮やかな女性用マスクや民族衣装、様々な生活道具を通して、半世紀にわたるサウジ女性の生活世界の変遷をたどった。

展示のサブタイトル「『みられる私』より『みる私』」は、片倉もとこ氏が自身のフィールドワークを通して見出だした視点に基づいている。日本社会では黒いベールで顔や体を隠したムスリム女性に対して不自由な生活を送っているというイメージを持っているが、片倉氏は現地女性との付き合いの中でベールを「匿名の解放感」ととらえ、女性たちは「見られる女」ではなく「見る女」としての自分に関心を持ち、主体的に生きていると指摘した。本展は、異文化理解を深めてもらうだけでなく、サウジアラビア及びイスラーム教徒の女性に対して抱く私達の偏ったイメージを払拭することも目的の大きな一つであった。

2 展示に至るまでの経緯

(1) 実施の契機

2003年に開館した当館は、ユーラシア地域に係わる考古、歴史、美術、民族に関する企画展を年に2回開催しているが、イスラーム地域及びイスラーム時代をテーマにした展示は特別公開も含めて過去6回実施し、主に、考古や美術をテーマにしたものであった。各展示のアンケート結果では展示内容に対する興味・関心が高いだけでなく、近年では「イスラームの歴史や文化についてもっと知りたい」「イスラームに関する展示を企画してほしい」「人々の

(1)片倉もとこ記念沙漠文化財団は、文化人類学者片倉もとこ氏の沙漠文化を研究し大切にするという志を受け継ぎ、沙漠文化に関する調査研究や芸術活動に対する支援、講演会やセミナーの開催、片倉氏収集資料の整理公開と活用推進等を行っている。

*TAKEDA Tamako 横浜ユーラシア文化館主任学芸員

生活を知りたい」といった要望が多く書かれるようになり、来館者のイスラームに対する興味・関心が徐々に高まってきていることを感じていた。そのため、イスラーム地域や文化に特化した展示は積極的に実施したいと思っていたところ、2016年秋に、当館のイスラームに関する調査、展示等にご協力頂いていた、東洋文庫研究員真道洋子氏を介して、民博の共同研究代表であり、沙漠文化財団の代表理事も務める秋田大学教授の縄田浩志氏から民博との巡回展実施の話が持ち込まれた。

展示については、開催時期は2019年度内、開催形態は、民博、沙漠文化財団との共催による企画展・巡回展、テーマは国立民族学博物館名誉教授であった片倉もとこ氏による研究内容とその後の研究発展を中心にして「沙漠のムスリム女性の暮らし」「オアシスの生活と半世紀の変容」「アフロ・ユーラシアの移動文化：ラクダと船」といった案が提案された。ムスリム女性やオアシスの生活というテーマはユーラシア地域の諸文化を紹介する当館で開催するのに相応しく、イスラーム文化に関心をもつ市民の要望に応えられる内容と考えた。

(2) 展示開催までの経過

民博では企画展の正式な手続きが始められ、2017年2月27日の会議にかけるという連絡があった。当館は先方が希望していた巡回時期である2019年秋にすでに別の展示を計画していたが、館内で日程調整を行い、2019年10月から12月の開催とした。民博での手続きが進められると同時に、当館でも2017年2月末には巡回展開催の了承を内部で取った。4月に民博での展示枠⁽²⁾が確保できたと報告があり、両館の開催時期が定まった。

当館では、2018年10月に館長、学芸系及び管理系職員が出席する運営会議で企画内容を諮った。11月、12月に民博、沙漠文化財団と展示タイトルを

検討、2019年1月に決定し、当館でも了承された。2～3月にかけて展示パネル類と図録となる関連出版物の原稿作成、4月中旬に式典と内覧会開催を協議、決定し、6月6日から民博で展示が開始された。6月20日に、民博教授西尾哲夫氏と沙漠文化財団代表理事縄田氏、そして当館の上山和雄館長、各担当者で展示及びイベントの実施方法と分担について相互で確認した。7月には館内で展示のアピール点を検討し、関連企画の整理と調整を行った。8月上旬に運営会議そして、当館が属する横浜市ふるさと歴史財団の理事長、館長が出席する経営会議にて事業計画書を提出した。また、ポスター、チラシのデザインを作成。9月は式典の招待状発送や式典の進行、席次の確認を行った。9月26日に記者発表を行い、10月4日に式典と内覧会、5日から展示開始となった。

(3) 展示立案までの経緯

本展の内容は、複数のプロジェクト⁽³⁾の成果に基づいている。展示準備にあたり、そのうちの一つである、民博内外の専門家で行なう共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」が2016年10月から開始された。2019年度末まで年5～6回程度の研究会が開催され、ここでの発表や議論が企画展の内容に反映されていた。企画立案に関わる展示担当者として、筆者も2017年の秋から研究会に参加した。

2016年末の段階では、展示テーマは民博名誉教授片倉もとこ氏による研究内容とその後の発展を中心としながらも、内容はまだ漠然とした状況であった。展示資料としては、民博及び沙漠文化財団が所蔵する、片倉氏がワーディ・ファーティマ地域で収集された民族資料を含めたサウジアラビアほか中東の資料、サウジアラビア民族衣装の個人コレクション、そして民博でデジタル化作業が進められている、片倉氏が50年前のサウジアラビアの調査や様子を

⁽²⁾民博の実施期間は2019年5月2日～7月30日となっていたが、2018年6月18日に発生した大阪府北部地震によって数か月の臨時休館を余儀なくされた。それに伴い、この企画展の開始日が2019年6月6日に延期された。

⁽³⁾人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」(国立民族学博物館拠点・秋田大学拠点)、国立民族学博物館「フォーラム型情報ミュージアム」プロジェクト、

撮影した写真等があった。

2017年度に実施した研究会では、展示の柱としてサウジアラビア、ワーディ・ファーティマとの関連を第1候補として、出陳候補資料の内容から「装い」、「香り」、「食べ物、飲み物」などの9つのテーマが挙げられ、各項目に担当者が分けられ、筆者は真道氏とともに香りに関わるバラ水と香炉、そして化粧道具を担当することになった。2017年10月に民博で展示に係わる資料を熟覧、2018年2月に担当部分の資料を選択した。この段階の内容は、今後行うワーディ・ファーティマでの現地調査で成果が得られることを前提としていたので、調査許可が降りなかった場合も考えて、ワーディ・ファーティマとジェッダというオアシスと都市の物質文化の比較といった案も出された。しかし、2018年5月に実施された第1回ワーディ・ファーティマ、フォローアップ調査で展示に関わる大きな成果が得られたことで、その内容はワーディ・ファーティマ地域に焦点をあてて半世紀の生活変遷を取り上げることが方向づけられた。

展示構成については、2019年1月下旬に図録の構成と合わせて決定した。これらの最終的な調整は沙漠文化財団と民博で行われた。

3 展示について

(1) 展示設営

巡回展のため、出陳資料、展示構成は変わらないが、資料の配置は展示スペースの関係上、若干変更したところもあった。展示構成を紹介すると、女性が顔を覆うためのブルグア（マスク）と共に「みられる私」より「みる私」という片倉氏の視点を紹介した「I ベールの内から見る」（口絵2）、暑い乾燥地で暮らすための住居の工夫と室内でのくつろぎの道具を示した「II 住まう」、半世紀前の个性的でカラフルな女性衣装の数々と様々な役割をもった装身

具を紹介した「III 装う」、最新の調査結果を通して生活用品の半世紀の変遷をたどった「IV 暮らす」、片倉氏と関わりのあった三人の女性達のライフヒストリーを通して現在を生きるサウジ女性の姿を伝えた「V 来し方、行く先」という5部構成になっており、3階企画展示室で展開した。民博会場では、全てを同じフロアーに配置できていたが、当館ではスペース上の制限があるため、片倉氏がサウジアラビアの文化や日本の異文化に対する姿勢について語った映像コーナーと、『アラビア・ノート』をはじめ片倉氏の主な著作を自由に読める書籍コーナーは2階常設展示室の一部に移した。

展示室を入った所には50年前の衣装を着た男女成人と女児のマネキンを展示した。当館では、50年前と現在の民族衣装の変化を比較できるように、展示室の外側にも、現在の衣装を着せたマネキンを配置した。来館者を迎えるようなポーズにして、撮影コーナーとした（写真1）。



写真1 展示室入口前の撮影コーナー

片倉氏が50年前に撮影された写真は、現地調査で被写体個人あるいは家族等に利用許諾が取れたものを、沙漠文化財団で大型パネルに製作し、それを借用した。当時の生活の様子がわかる貴重な写真で、展示の目玉となる資料の一つであった。解説パネル等は民博で作成したものを借用した。キャプション

国立民族学博物館「新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム地域研究に関する地域研究画像デジタルライブラリ（DiPLAS）」

国立民族学博物館共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」等を含む6つのプロジェクト。

は日本語だけでなく英語と現地で使用されているアラビア語の表記も併記された。外国人来館者のためと思っていたアラビア語の表記は、予想外にアラビア語を学ぶ学生達が熱心にチェックしていた。来館者からは資料の素材が知りたいという感想を多く頂いた。衣装の素材は判別が難しいためあえて明記しなかったが、今後の参考としたい。

(2) 展示に関わる広報

①印刷物

巡回展ではあったが、印刷物のデザインは新たに作成し、ポスター、チラシ、チケットを作成した（写真2）。ナツメヤシのシルエットを背景にして、本展の展示テーマを象徴する資料であるブルグア（女性用マスク）を中心にすえたミステリアスなデザインは、サブタイトルの言葉と相まって、見る者に強烈なインパクトを与えた。アンケート調査では、「通りがかって来館」された方の中で「ポスターのデザインとタイトルに魅かれて」を来館理由に挙げている方は、「イスラーム文化に興味をもって」という回答の次に多く、印刷物のデザインが印象的であったことを示す結果となった。



写真2 展示チラシ

②新たな広報手段

毎日新聞神奈川版にて、展示資料の紹介を中心にした6回の連載を行った。また、本展に合わせて当館の公式ツイッターを開始、展示やイベント情報をアップし、広報手段の一つとして、来館者からの拡散をねらった。アンケート回答者の中には、ツイッターで本展を知ったという方もいらして新しい客層の獲得につながった。

③展示室の写真撮影

民博会期中は展示室を撮影禁止にしていたが、当館開催時には、サウジ関係者から積極的な展示広報の要望が挙がり、来館者からも撮影希望の声が寄せられていた。資料所蔵者及び関連機関との調整を行って、12月初旬から展示資料の一部について撮影可能とした。当館では、撮影可と不可のマークを資料1点ずつに置くつもりであったが、民博側から見学者には目障りになるという意見が出た。最終的に50年前の衣装を着たマネキン展示、ブルグアとその近くの写真パネル「ブルグアをつけた3人の女性」、女性用衣装の3つのコーナーを撮影可として、パネルスタンドで表示を置き、各資料に撮影可のマークをつけた。撮影可能の期間はわずか数週間となってしまうが、撮影した画像をツイッターにあげるなど、広報拡大につながった。

4 出版物

展示図録ではなく、展示関連出版物という位置付けで、縄田氏が監修編集、沙漠文化財団が発行、河出書房新社から発売され、各館で必要部数を買取る形になった。内容は展示構成に基づきつつ、展示に出陳する資料全てを掲載することを前提として、現地で許可を得られた片倉氏が撮影された写真もできるかぎり収録された。写真はオールカラーで、181頁という充実したものとなった。執筆は展示項目の各担当者が行った。

5 式典と内覧会

展示開始日の前日10月4日に式典と内覧会を横浜情報文化センターにて行った(写真3)。来賓として横浜市荒木田百合副市長(写真右から3番目)、サウジアラビア大使館文化部ガーリー・アルモハメッド様(写真左から3番目)、アラブ イスラーム学院アハマド・アルハルビ副学院長(写真左から2番目)、ムスリム世界連盟日本支部アナス・ムハンマド・メレー代表(写真右から2番目)をはじめ、共催、当財団の関係者、マスコミの方々にご参加頂いた。式典前には、来賓者、関係者同士の談話会を催し、サウジと横浜の親交を深めた。



写真3 式典に出席された来賓の方々(向かって左は縄田氏、右は沙漠文化財団片倉雄評議員会議長・日本アラブ協会副会長)

6 関連企画事業について

今回は、日本人にはあまりなじみのないサウジアラビアやイスラーム文化、また、文化人類学的な内容を初めて扱う機会となるため、展示内容をより理解できるように多彩な講座やワークショップ、イベントを実施した。その内容については沙漠文化財団から提案を受け、2018年末から協議を重ね、当館に適した実施方法を探っていった。特に、イベントやワークショップでは、五感で体感することが異文化理解につながるような工夫を行った。次に各事業

の概要を紹介する。

(1) パネル展「イスラーム&サウジアラビア&横浜を知ろう!」(写真4)



写真4 パネル展の様子

本展は、イスラームの宗教を知ったうえで観覧したほうがより理解が深まるが、当館の常設展示室ではそれらを扱っていないため、会期中に1階ギャラリーにてパネル展を行った。礼拝、断食、巡礼、コーランといったイスラームの用語説明、サウジアラビアの基本情報、日本とサウジの輸出入の関係、アラビア語やイスラーム文化を学ぶ横浜市内の中学高校生の取り組みといったサウジと日本の意外なつながりを10枚のパネルで紹介した。パネル展を監修頂いたムスリム世界連盟日本支部代表で、サウジアラビア・マッカ出身のアナス・メレー氏には、11月9日のギャラリートークでサウジの文化やイスラームの聖地マッカについてお話頂き、29名の参加者を得た。パネル執筆に際し沙漠文化財団理事で、イスラーム教徒である河田尚子氏にご協力頂いた。

(2) 調査関係者による連続講座

現地調査や展示に携わった関係者が、各自担当したテーマで話をする5回シリーズの講座を行い、のべ142人が参加した。各回のテーマと講師は次の通り。10月27日(日)第2回「女性の衣装と装身具の魅力」講師 遠藤仁(人間文化研究機構研究員)、郡司みさお(片倉もとこ記念沙漠文化財団理事)

11月10日(日)第3回「片倉もとことアラブ・イスラームの文化人類学」講師 片倉邦雄(片倉もとこ記念沙漠文化財団評議員会議長)、西尾哲夫(国立民族学博物館教授)

11月24日(日)第4回「女性の生活空間とてなし」講師 西本真一(日本工業大学教授)、竹田多麻子(当館学芸員)

12月1日(日)第1回「オアシスを生き抜く知恵」講師 縄田浩志(秋田大学教授)、坂田隆(石巻専修大学教授)⁽⁴⁾

12月8日(日)第5回「写真と画像から読み解く景観と暮らしの変化」講師 藤本悠子(片倉もとこ記念沙漠文化財団主事)、渡邊三津子(片倉もとこ記念沙漠文化財団理事)

5回全ての講座に出席された方はいらっしゃらなかったが、ご自分の興味ある回に参加され、講師に熱心に質問され話し込まれている参加者の姿は印象的であった。5回参加すれば特典があるような仕掛けを作ってもよかったかもしれない。

(3) ギャラリートーク

展示室で資料を見ながらの解説を縄田氏と展示担当者で計5回行い、のべ107人が参加した。

(4) 講演・試着体験「移りゆくアラビア衣装」

10月6日、情文プラザにて開催し、30人の参加者を得た。毎週末に行う Week-day ワークショップでも民族衣装の試着をしていたが、ここでは、サウジアラビアの民族衣装をより詳細に説明し、試着によって「ベールの内側から見る」体験をしてもらうことを目的にした。最初にイスラーム教徒の視点から見たアラビア衣装と、ワーディ・ファーティマにおける衣装の半世紀の変遷について、沙漠文化財団の郡司みさお氏、河田尚子氏、藤本悠子氏による講演があり、次にアラビア衣装を試着して着心地など

を感じてもらった。その後、参加者には衣装を身に着けたまま、展示室での解説に参加して頂いたが、誰も着替える人はおらず、皆積極的であったのは驚きであった(写真5)。30～40代の女性が多いよう



写真5 衣装を身に着けて展示解説を聞く

だったが、男性も年配者を含め数名いらした。皆、初対面であっても衣装を身に着けた感想をお互いに語り合っていた。ベールとブルグアを着けたまま展示室を歩いた参加者からは「実際はこのように見えるのか」という驚きや「楽しかった」という喜びの声があがった。ある女性参加者からは「ベールを実際に体験してみて良かった。体験してみるからこそわかることがある。」という感想も頂いた。

(5) ペーパークラフト「民族衣装マハーリードを和紙で作ろう！」(写真6)

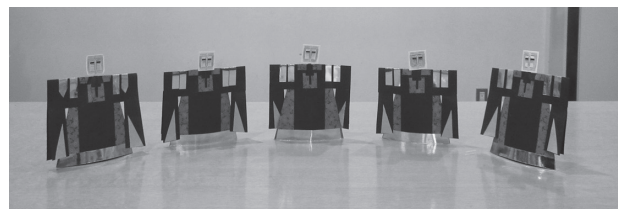


写真6 完成したマハーリードのペーパークラフト

ワーディ・ファーティマのある地域の民族衣装であるマハーリードは、振袖のついた女性用晴れ着である。その作り方は1枚布を複数のパーツに裁断し

⁽⁴⁾10月13日の実施予定であったが、台風接近のために延期にした。

て縫製する、日本の着物の作り方によく似た、この地域独特なものである。衣装の仕組みを理解し、布が効率よく使われていることを知ってもらう目的で企画した。最初に沙漠文化財団から相談を受けた際は、布地を使っただけの体験にしたいということだった。しかし、はさみなどの使用、限られた作業時間、教える側のスタッフ人数などを考慮すると、布地は難しいと判断し、その代わりに縮尺して紙での実施となった。和紙をあらかじめ各パーツに切っておき、参加者はそれを糊付けするという、衣装の仕組みがわかり、簡単に仕上げることができる内容になった。同じパーツを使っているにもかかわらず、袖の長短があったり、大きさが変わったりして完成品は人により異なっていたことが興味深かった。11月3、4日、12月7日（2回）に実施したが、のべ17人の参加者であった。マハーリードの説明とペーパークラフトの指導は沙漠文化財団の郡司みさお氏、藤本悠子氏、渡邊三津子氏が担当した。

(6) Week-end ワークショップ（写真7）

毎週末と祝日に、サウジアラビア衣装の試着とブルグア（女性用マスク）の塗り絵を行った。会期中の参加者はのべ405人であった。



写真7 自作のブルグアと衣装を着けて記念撮影をした小学生達

民博の展示の際に、民博の特任助教黒田賢治氏がブルグアをA4サイズにデザインしたものをすでにワークショップのチラシ用に作られていたので、そのデータを提供頂き、当館では自分の好きな色を塗れるように塗り絵にした。試着用衣装は、郡司みさお氏からお借りして、子供から大人まで男性女性の様々な衣装を揃えた。ブルグア試着の際には、衛生面を考えて、マスクを先に装着してからブルグアを着けるようにしたが、参加者の中には、サウジでもそのようにして着けていると勘違いされる方もいて、説明不足であったことを反省した。Week-end ワークショップ実施にあたっては、横浜市歴史博物館活動ボランティアの協力を得た。

(7) イベント「遊牧民のテントでアラビア文化を体験！」（口絵2）

11月の連休に合わせ、10月29日から11月4日の一週間、サウジアラビアのテントを中心にしたイベントを当館隣の横浜情報文化センター1階の情文プラザにて行った（参加者数1,556人）。10月28日にテントを設置した。テントは現在のサウジアラビアで実際に使われているもので、内部にはソファークッションを配置、テント周りにはナツメヤシの木の葉でできた籠類、アラビアコーヒー作りの道具や香炉などアラブ文化を伝える生活用品が置かれ、これらは自由に触れるようになっていた。イベント期間の開館時間中は、誰でも内部に入って自由に見学できるようにした。

そもそもテントを建てるきっかけとなったのは、2018年に東京国立博物館で開催された企画展「アラビアの道」の関連イベントとして、テントが館の庭園に登場したという話を沙漠文化財団の藤本氏と郡司氏に聞いたことである。テントからアラブ文化をより具体的に感じられると思い、早速両氏にイベントを企画されたアラブ イスラーム学院をご紹介

頂き、2019年4月末にテントの設置とイベントの協力を依頼した。学院からは、テントの設置だけでなく、テントやサウジ文化を説明する学院スタッフの派遣、そして連休となる3日間分のアラビアコーヒーとデーツの提供という嬉しいお申し出を頂いた。

3連休であった11月2日～4日は、日本に留学しているサウジの学生たちが民族衣装を着て解説ボランティアとして活躍してくれた。これは、ムスリム世界連盟日本支部を通してサウジアラビア大使館文化部に協力頂いた。

テントを中心にして次の三つのイベントも企画した。①アラビアコーヒーとデーツの提供、②「サウジアラビア女性の夜会を体験しよう!」、③コーヒー体験講座「サウジアラビアのコーヒー文化」である。①のスパイスの香りがするアラビアコーヒーと自然の甘味が美味しいデーツ（ナツメヤシの果実）は、客人のもてなしや仕事の打ち合わせなど、どのような場面でも供されるもので、サウジアラビア文化の一つと言える。このイベントで是非試食体験を実施したいと思っていたが、会場となった情文プラザ内では飲食禁止であった。そのため、建物管理者と協議の上、テント内での飲食であれば可能とご了承頂いた。当日は、アラブ イスラーム学院がイベント参加者に行き渡る量のコーヒーとデーツを準備してくださり、サウジアラビア人のスタッフがサーブを担当した。来場者の中には、初めて口にするアラビアコーヒーとデーツの味に驚かれていた方もいれば、食べたことがあって好きという方もいらした。味覚を通して、サウジ文化の一端を紹介することができた。

②の夜会は、縄田教授の元で学ぶ秋田大学国際資源学部の学生3人による自主企画である。半世紀前に片倉もとこ氏が体験したサウジ女性の夜会を再現するべく、参加者にサウジの衣装を試着してもらい、

アラビアコーヒーとデーツでもてなし、そして当館中庭で香炉で焚いた香りを楽しんでいただき、学生たちが9月に実施したサウジアラビアでのフィールドワークの成果をテント内で発表するという内容である。実体験に基づいた発表は大変充実しており、参加者からも好評であった。11月2日に、1回5人定員で4回実施した。残念であったのは、秋田大学学生とのやり取りが遅くなり、直前まで実施内容が把握できなかったことである。こちらから学生へ積極的に働きかけて情報を共有する必要があった。③は縄田氏を講師として11月3日にコーヒー講座を実施した。まずはアラビアコーヒーを味わってから講義を聴くという順番にするため、テントの隣のスペースで実施した。30人の定員であったが、立ち見も出る程の盛況ぶりで、参加者のアラビアコーヒーに対する興味・関心の高いことがうかがわれた。

イベントの実施にあたっては、アラブ イスラーム学院、サウジアラビア大使館文化部、ムスリム世界連盟日本支部、サウジアラビア留学生、秋田大学、沙漠文化財団という多くの関連機関と連携しながら進め、当館だけでは実現できなかった、充実した内容にすることができた。

(8) ごはんで世界一周! サウジアラビア編 (写真8)



写真8 デーツの説明を受けてから調理開始

横浜市野毛地区センター主催で行っている企画で、様々な外国人が多く住む中区で、「食（試食）」を通してその国の文化に興味を持ってもらうことを目的にしている。今回は、デーツを通してサウジの文化を紹介したいために協力を仰いだ。10月19日に、民博研究員の石山俊氏の指導のもとデーツを使ったパウンドケーキを調理、その後、アナス氏にスライドを見ながらサウジの食文化の話を聞き、最後に、アラビアコーヒーとともにケーキを試食した。9名の参加者を得た。

7 ワーディ・ファーティマでの現地調査

この展示の事前調査と準備のために、第2回ワーディ・ファーティマ、フォローアップ調査が、サウジアラビア遺産観光庁が受入先となり、沙漠文化財団が中心となって実施され（2018年12月22日～2019年1月12日）、筆者は12月22日から1月5日の15日間に参加した。2015年の予備調査、2018年5月の第1回のフォローアップ調査では、半世紀前に片倉氏と関わりのある人物とつながりができ、さらに新しいネットワークを構築できる目途がたったようだ。第2回調査の主な目的は、片倉氏が50年前に撮影した写真の被写体人物の同定、写真を展示の印刷物やパネル、刊行物に使用するために被写体本人や家族から写真使用の許諾を得ること、そして調査地での物質文化の変容をさぐることであった。筆者自身の調査目的としては、展示担当となっているクフルという顔料を入れる化粧道具と香炉やバラ水などの香り文化が半世紀を通じてどのように変化しているのかを確認するためであった。

今回、ワーディ・ファーティマ地域の2つの村で、女性達に聞き取り調査を行った。限られた時間内で写真人物の同定や利用許諾まで取らなければならないので、聞き取りにかけける時間はあまり取れなかったが、課題であったクフルをつける時とつけない時

の違い、用途など興味深い話を伺うことができた。ジェッダではサウジ各地の伝統衣装や習慣などを絵画作品として記録を残している女性画家サフィア・ビンザグル氏のもとでクフルの作り方や使用方法を教えて頂き、スークにあるアッタール（香料商）では販売されている化粧顔料や香料について実際の事例を知ることができた。このような調査の成果だけでなく、サウジで自分自身がアバーヤとベールを身に着け、「ベールの内から見る」ことを体験できたのは、大変意義深かった。この体験やサウジの印象については、ギャラリートーク等で紹介した。

おわりに

今回の展示は、現地調査、企画立案から携わることができ、また、博物館と研究団体と共に進められたことで、単独館ではできなかった経験をする事ができたのは、大変勉強になった。

アンケート調査では、展示に対する満足度は97.2%に達し、「サウジアラビアやイスラームの文化に興味・関心をもった」、「イスラーム女性に対するイメージや理解が偏っていたことに気づいた」という感想が多く寄せられ、この展示が実施目的である異文化理解を高めることに多少なりとも貢献できたと考えている。

博物館で異文化理解を深めるためには、展示の中で来館者が実際に「体験する」ことが一番の方法であると、本展を通して実感した。特に、今回実施した試着や香り、食といった五感で感じる企画は、そのものだけでなく、その背後にある国や文化に対しての興味・関心を喚起するものであった。また、サウジアラビア現地の方と直接話をしたり、質問できたりしたことも来館者にとっては異文化を身近に感じられたようだ。このような企画ができたのは、博物館、研究団体、研究所、大使館、企業など多くの関連機関からの協力と連携で実現したことにある

が、これらを結びつけられたのは当館の柔軟性と機敏性に負うところと言えよう。また、大規模なイベントを開催できたのは、巡回展のおかげでパネル・キャプション作成の作業軽減や時間短縮、刊行物発行の負担軽減ができ、準備のために多くの時間をかけられたことが大きかった。一方、規模の大きい事業を実施するには、展示担当者だけでは負担が大きくなり、運営側の実施体制を整えていく必要もあったことを痛感した。

今回構築したネットワークを活かして、今後も博物館での「体験」が異文化理解につながるような企画を考えていきたい。

本展では民博、沙漠文化財団をはじめ多くの機関の方々に多大なご協力を頂きました。感謝申し上げます。また、この企画の分担者であった真道洋子氏とは共に調査と準備を進めていたが、2018年秋に急逝された。心よりご冥福をお祈りいたします。

横浜ユーラシア文化館 第8号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 8

2020年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館

〒231-0021 横浜市中区日本大通12

Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453

www.eurasia.city.yokohama.jp/

発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

印刷製本 朝日オフセット印刷株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures

12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan

Published by the Yokohama Historical Foundation

Printed in Japan by Asahi Offset printing Co., Ltd.

©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2019

ISSN 2187-7734